道路　　かつての生活路である赤道が街道から南北に延びる状況は、原形に近い状態である。指定地及びその周辺において南北に延びる乗用車の通行可能な道路は、「島田大堤」、「高土手跡」と島田大堤の東側と、それに三太郎西（上）土橋の東側の水路を改修した４道路に限られている。

第５節　史資料調査

川越しに関する史資料調査では、川越しに関する記述が見られる日記や紀行文、古文書等の文献資料の調査を行うとともに、川越場の様子を描いた絵巻や浮世絵のほか関連する写真も含めた絵画資料の調査を行った。

１　文献資料

①紀行文・名所記等

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
丙辰紀行	元和２年（1616）	徳川家康に重用された儒学者林羅山が東海道を上った様子を記している。大井川について、島田宿が河原の中になることもあるほどの急流で、島田宿の民が自分の家が流されても旅人の懐をむさぼって洪水をよろこぶと述べ、舟、筏、橋が無いと記している。
辛酉紀行	元和７年（1621）	徳川幕府の作事奉行を勤め、茶人として有名な小堀遠州が東海道を上った際に記した紀行文。大井川にさしかかり京都の大堰川（桂川）を思い出しながら、急流の大井川を渡る際に衣が濡れた様子を和歌に詠んでいる。
癸未紀行	正保２年（1645）	儒学者林道春が寛永 20 年（1643）京都に上った際に詠んだ詩と、同年著者の息子春斎が京都に往復した際の詠詩を合編したもの。9 月 21 日、街道一の奔流大井川を籃輿（連台）に乗って渡り、京都の大堰川と同じ呼称であるが、ここには桴（筏）も船ないと述べている。
海道日記	明暦３年（1657）	儒学者山鹿素行が承応 2 年（1656）に浅野家に招かれ赤穂に赴いた時の旅日記。永禄年間、武田信玄と徳川家康が大井川を境とし、家康が遠州を治めたことを述べる。また、下流の色尾の下瀬越しについても触れる。大井川と題する七言絶句を詠む。
道中記	明暦３年（1657）	江戸時代前期に出版された旅行案内書。大井川について、島田・金谷の馬方と川越人足が示し合わせて浅い瀬をはずして深い所を通り高額な渡し賃を要求するとしている。また島田・金谷で宿をとり川越しの値段を

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
		決める方が得策で、大井川の川端で値段交渉すると、宿で決める場合の 3 割増しで取られ、出家・町人・伊勢参りの旅人は特に多く取られるとして注意を促している。
東海道名所記	万治年間（1658～60）	仮名草子作家であった浅井了意が書いた東海道の名所記。大井川については林羅山の「丙辰紀行」を引用して紹介。また、島田・金谷で宿泊し、宿で川越しの値段を交渉すべきで、河岸では値が高く、出家・町人・伊勢参りの旅人はさらに高くなると忠告もしている。
身延の記	寛文 3 年（1663）	日蓮僧元政が自分の母親を伴い京都から身延山の久遠寺に詣でた際の旅日記。島田にお茶壺道中が宿泊したため、金谷で宿泊し、翌日大井川を渡った。水の引けた大井川を徒歩で渡る人が多いことを記す。
日本滞在記	1667 年	スウェーデン人ヴィルマンがオランダ使節に随行して来日し、慶安 5 年（1652）に江戸参府のため日本を旅した際の旅行記。大井川を馬に乗って渡る際、流れに押し流されないように、二人の男によって馬が抑えられながら渡った様子を記す。増水時は危険なため川留めになることも付け加えている。
海陸世話日記	寛文 8 年（1668）	加賀吉崎の長屋與四郎が材木購入のために海路で南部地方へ行くが暴風で八戸に漂着し、そこの住民に船を壊されたため訴訟で江戸に赴き、その帰路の旅を記す。大井川を渡る際、川越人足が来て、危険なため自分等に川越しを頼むよう勧めるが、300 文を求められ、刀・着物をとって裸になり自分で渡ったと記す。
日本誌	寛文 9 年（1669）	モンタヌス著。大井川について、雨季には水量が多く流れが強くなるので渡るのが困難になるとし、今回は久しく雨が降らなかったので容易に渡ったと記す。
帰家日記	元禄 2 年（1689）	讃岐丸亀藩士の娘井上通が江戸から郷里へ帰る旅の様子を記した紀行文。6 月 15 日に大井川の水が引けて石の河原が長く続いた後、川を渡って金谷に着いたことを記す。また大水が出た際に島田・金谷の両岸の間が満水をたたえる話を聞き、その恐ろしさについても想像して記している。
東行別記	宝永 2 年（1705）	備前の儒学者松井良直が寛文 7 年（1667）3 月に播磨から江戸へ下った際の日記。大井川について、橋も船もなく、日照りの頃は問題がないが、雨が降ると巫峡（ふきょう）（中

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
		国長江の山峡の一つ）に匹敵する激しい流れで東海道一の難所となり、通るのが難しいと記している。
庚子道の記	享保５年（1720）	尾張徳川家に仕えた武女（むめ）とよばれる女性が、藩主徳川継友の江戸下向に同行した際の旅日記。2 月晦日に雨上がりの大井川を連台に乗って渡り、逆巻く水に落ちそうで恐ろしかった感想を記している。
東行説話	宝暦 10 年（1760）	将軍任官の勅使に随行した土御門泰邦卿の旅日記。正月 20 日、川越人足が赤裸で輿を連台にくくりつけ数十人で渡す様子を記し、大井川を和歌に詠んでいる。
東海済勝記	宝暦 12 年（1762）	播磨高砂の歌人三浦辻斉が東北・北陸を巡った際の旅行記。牧之原からの大井川と富士山の景勝をたたえ、大井川を怖がりながら連台で渡った感想を述べている。
時雨日記	安永５年（1776）	建部俊足が明和７年（1770）に京都から江戸へ向かう旅での想いを和歌に詠む。同年 10 月 17 日に京都を出立し、江戸に赴いた際の紀行文。
江戸参府旅行日記（日本誌）	1727 年	元禄 4 年（1691）ドイツ人で長崎のオランダ商館医ケンペルが江戸参府のため東海道を旅行した際の記録。川底の様子に詳しい川越人足が命がけで旅人の安全を保障して渡すことや川の水位で川越しの値段が決まること、さらに渡し賃と引き換えに川役人から受け取った油紙を渡りきった後に人足に手渡し、戻った人足が油紙を換金することなど、川越しの仕組みについても詳しく記している。このほか、大井川が日本の作家や詩人に影響を与えたことを付け加えている。
東遊紀行	安永９年（1780）	俳僧蝶夢が安永 9 年（1780）に木曽路を経て江戸に出て東海道を上った旅日記。4 月 22 日川明けで、6 人で担いだ連台に 2 人ずつ乗って金谷側へ渡る。6 筋に分かれて流れる大井川を渡る川越人足の頭が、水鳥などが浮いているように見えたと記す。
東海道名所図会	寛政９年（1797）	著者は秋里籬島で、東海道の名所旧跡について過去の書物の説明を引用し、豊富な挿絵で紹介。大井川について十六夜日記や東関紀行、丙辰紀行などを引用して説明する。
改元紀行	享和元年（1801）	旗本で狂歌師・戯作者として有名な太田南畝（蜀山人）が東海道を上って大坂に赴任した際の紀行文。大井川では日が暮れて雨が降る中、駕篭を連台の上に結びつ

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
		けて、川越人足たちが掛け声をかけながら渡った様子を記している。
羈旅漫録	享和２年（1802）	戯作者として有名な滝沢馬琴が江戸を出発し、上方を歴遊した際の随筆。往路では５月 20 日に島田宿に至り、大井川の川留めに遭い因幡屋向かいの商家に逗留し、川留めによる大名や旅人の逗留で宿場が江戸のようであったと記している。また復路は８月 18 日に大井川にさしかかり、雨が降る中、乳通しの水嵩で、川越人足一人に対し 94 文を支払い連台に乗って渡ったことを書き残している。
長崎紀行（長崎行役日記）	文化２年（1805）	水戸の地理学者長久保赤水が明和 4 年（1767）に異国から長崎に送還された常陸の漂流民受取りのため、長崎へ赴いた際の紀行文。閏 9 月 9 日金谷宿に泊まり、大井川について、駿遠の境で水浅く越賃 50 銭（文）だったと記す。
東藩日記	文化３年（1806）	京都の医師茅原元常虚斎が寛政６年（1794）に江戸へ下った際の旅日記。大井川には砂礫が広がり旅人の草履を噛むようであったと記す。渡渉方法には連台と肩車の２方法があり、川越人足が数百人にものぼり、互いに呼び声をかけながら激しい水の中に入っていくと記している。
旅の命毛	文化４年（1807）	堺町奉行土屋紀伊守の妻が和泉へ行く際に記した旅日記。果てしもない川原に鬼のような赤裸の川越人足がいて、輿を連台にくくりつけ、高く押し上げて川に入り金谷へ渡ったと記す。渡り終えると女性は皆青い顔をしていたと、その恐ろしさを伝えている。
吾妻乃都登	文化９年（1812）	西浦祐賢が文化５年２月浪速を発して江戸に遊んだ時の紀行文。大井川の河岸で渡渉の仕方を尋ねると、渡丁（川越人足）に、先ず川会所に行って金額を決めることを教えられ、連台に乗って渡ったと記す。
草まくら	文化 15（1818）	狂歌師の石川雅望（宿屋飯盛）が文化元年（1804）に江戸から東海道を上って、京・大坂に遊んだ際の紀行文。２月 15 日に大井川を連台に乗って渡り、この頃は雨が降らなかったため、水深も浅く穏やかであったと記す。また３月 15 日の帰途の際には大井川の増水を危惧して事前に金谷の河村某に手紙を送り、夕方大井川を渡っている。

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
江戸参府紀行（日本）	1832～51 年	ドイツ人で長崎のオランダ商館医であったシーボルトが文政 9 年（1826）に江戸へ参府した際の紀行文。大井川には太陽暦の 4 月 2 日に到達し、肩車や連台による渡渉方法、川越人足の容姿を記録するとともに、危険かつ責任の重い川越人足の仕事に高い関心を持っていたことがうかがわれる。
豊後紀行	文政 3 年（1820）	文人として知られる田能村竹田が文政 3 年（1820）に参勤交代に従って、豊後に向かった際の旅の記録。2 月 26 日には大井川の水が浅く、たやすく渡ることができた喜びを記している。
驥蟲日記	文政 3 年（1820）	儒学者河崎良佐（敬軒）が文化 2 年（1805）に菅茶山とともに江戸から東海道を上る旅の様子を漢文で記す。3 月 3 日大井川を無事に渡り、菊川で酒を買って飲んでいる。
東海道下り日記（広重日記）	天保元年（1830）	保永堂版東海道五十三次の作者安藤広重が京都から江戸へ下った時の日記。9 月 6 日の晩に金谷宿に泊まり、大井川の渡しに想いを馳せて眠りにつき、翌 7 日霧深い朝のうちに大井川を渡って島田側に到着し、雄大な景色に感動して、写生をしている。また道が川原並みに石ころだらけで足を傷つけるとも述べている。
西游紀程	天保 2 年（1831）	漢学者大槻磐渓が文政 18 年（1827）に江戸を立ち、関西・九州を遊学した際の紀行文。2 月 27 日、島田宿の問屋で川会所の役人でもあった桑原苾堂の計らいで、壮健な川越人足によって大井川を渡ったことを記す。
中空日記	天保 6 年（1835）	歌人の香川景樹が文政元年（1818）に江戸から京都へ帰った際の紀行文。11 月 15 日に連台に乗って大井川を渡り、その際、後ろ向きに乗れば、富士を真向かいに見ることができると記す。
三州日記	天保 12 年（1841）	天保 12 年 10 月に三河の田原で自刃した渡辺崋山の検視役人として田原へ派遣された江戸町奉行組与力の中嶋元英による往復 19 日間の日記。11 月 2 日、駿遠の境で街道一の大河と聞く大井川であるが、水が引いて川原が広がり聞いていたほどではないが、水の勢いは早く、8 人持ちの連台で渡ったことを記す。
神の御蔭の日記	天保 12 年（1841）	国学者藤井嵩尚が寛政 11 年（1799）に京都から江戸へ赴いた際の旅日記。大井川が浅く、思いのほかたやすく渡ることができたことを記す。

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
窓の曙	弘化２年（1845）	歌人の僧似雲（金屋吉右衛門）が享保 15 年（1730）に関東へ下る際に詠んだ歌を記した紀行文。大井川について「箱根八里」の馬子唄を引用して触れ、12 月 20 日に川の水が引けて容易に渡ったことを記す。
東遊日記	嘉永４年（1851）	吉田松陰が江戸に遊学した際の旅日記。4 月 2 日に肩輿で大井川を渡り、橋を架けず大名の費えとなる川越しを、島田・金谷の人々を潤すと記している。
諸国廻歴日録	安政元年（1854）	鍋島藩士の牟田高惇が諸国を剣術修行で回った際の記録。嘉永６年（1853）12 月 2 日に金谷から大井川を渡り、2 人半払いして 203 文であったと書いている。
己未東遊記草	安政６年（1859）	著者不詳。大井川 88 文越しで 10 人分の渡し賃が 916 文であったと記されている。

②幕府記録

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
大猷院殿御実紀（徳川実紀）	文政年間	寛永３年（1626）7 月 21 日の条に三代将軍徳川家光が上洛する際、この地を治めていた徳川忠長が大井川に浮橋（船橋）を架けて渡渉の便宜を図ったが、大井川が関東鎮護の要衝であることを理由に家光の怒りに触れたことが記されている。

③地誌

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
一目玉鉾	元禄２年（1689）	浮世草子・人形浄瑠璃作家であった井原西鶴が著した蝦夷地から長崎・壱岐・対馬までの絵入り地誌。大井川について日本第一の急流で、川越人足なしでは渡ることができない東海道一の難所と記している。
東海道名所図絵	寛政９年（1797）	文は秋里籬島、画は竹原春泉斎によって東海道の各宿場や名所・旧跡について書かれたもの。大井川についてはこれまで書かれた主な作品の文章を引用して説明している。また、大井川には昔から舟や筏、橋がなく、旅人は川越所（川会所）でその日の渡し賃の金額を聞いて割符を買い、連台や肩車で渡ることや、相撲取りや大名の川越しの方法についても記載している。
駿河記	文化15年(1818)	島田宿の素封家であった桑原黙斎がまとめた地誌。大

書　　名	年　代 （著作・序文・刊行年等）	内　　容
		井川について、昔から渡船・橋梁が無く、歩行渡しで、出水時は島田・金谷の両宿に旅人が滞留したことや、家光上洛時の浮橋の一件、島田大堤の長さなどを記す。また白岩寺の山頂から西方を見渡した挿絵が掲載され、島田宿から金谷宿へ続く街道の松並木と南流する大井川の様子が描かれている。
島田町沿革ノ概略	大正３年（1914）	慶応４年(1865)から明治４年（1871）まで川庄屋を務めた飯塚為八（九如）が島田宿について記したもの。川越しについて、人足の役割や人数、御状箱の川越し方法のほか、権蔵わらじや川会所の高札について記載している。

④古文書・古記録

書　　名	年　　代	内　　容
島田古帖	正保元年～寛政12年（1644～1800）	島田の私家文書。川越人足の人数や大井川の川幅などの記載が見られる。
天香堂雑記	貞享元年～文政13年（1684～1830）	島田の私家文書。島田宿、大井神社の成り立ちや問屋業務、宿内の除地など多岐にわたる内容の文書が綴られている。河原町の長さや並木、川越人足の屋敷の除地などについて記す。
塚本家文書	元禄15年～弘化4年(1702～1847)	河原町高土手東側にある塚本家に残された古文書。肥前大村藩をはじめとする大名等が当家を茶屋本陣として利用していたことや、大名の川越しに関して便宜を図った内容が記されている。
島田宿規則糺一件	元文６年（1741）以降	島田代官大草太郎左衛門の手代岡田助十が記したもの。三代将軍徳川家光の浮橋の一件や川会所・川庄屋の設置について記すほか、川越人足の人数や川越場の土橋の名称・規模についての記載が見られる。
岡本家文書『島田市史資料』第２巻	安永６年～文化６年（1777～1809）	島田宿の私家文書。内容は問屋方の不正に関する訴訟や島田宿の形成と築堤、無役除地の内訳など多岐にわたる。川越しについては渡渉方法や規則、幕府要人の渡渉の際の人足数の定めのほか、刎銭の取扱いを巡って川越人足等が川役人を訴えた訴状も含まれる。
島田宿書上控『島田市史資料』第１巻	享和３年（1803）	道中奉行が『東海道分間延絵図』製作に当たって各宿に提出させたもので、島田宿の位置や規模、除地のほか、街道について記す。川越しに関しては、川会所の

書　　名	年　　代	内　　容
		規模や川越従事者の人数、連台の数、川会所の前にあった高札の内容などを詳しく記している。
島田宿明細帳	享和３年（1803）	前掲「島田宿書上控」同様に、幕府が各宿に提出させたものの控。川越しに関しては川会所の規模や川役人、人足・連台の数、川越しの各限界水位のほか、川会所前の高札文などが記されている。
東海道宿村大概帳	天保14年(1843)	幕府が東海道沿いの宿場や村々に対し、その規模や地勢などを書かせて提出させたもの。島田宿の人口や生業、旅籠の数など、宿場の概要を記す。川越しに関しては川越場にあった高札場と高札の禁制、土橋の名称や規模、街道の道幅、連台・人足数などについて詳細に記している。
小城様蓮池様鹿島様御渡川方控『島田市史資料』第３巻	文久３年（1863）	島田代官所が、大井川が川留めになった際に渡船を行うことについて意見を求めたことに対し、島田・金谷両川庄屋が、人足が渡船業に不慣れであることや川越人足が失業して宿場へも悪影響を及ぼし、公用の継立てに影響を及ぼすことを理由に、反対の回答をしている。
島田駅志	慶応４年（1868）	島田宿の本陣を勤めた置塩寿老太（綯斎）が島田宿について漢文で記したもの。川会所について、街道の北側に位置し、南面して幕が掛けられていたことや、川役人が十数名、川越人足が600人ほどいたことを記す。
大井川架橋の建議『島田市史資料』第５巻	明治２年（1869）	明治政府公議所において書かれた議案文。大井川の架橋方法について、石橋や繰出し橋は建設費用がかかるため、船橋の設置を提案している。
佐塚家文書『島田市史資料』第５巻	明治３年（1870）	明治３年４月に島田・金谷の両川庄屋・百姓代らが島田役所に宛てた通船反対の嘆願書。通船のために川底を掘り込むと田畑に水を引き込めず、年貢にも支障をきたすとしている。
佐塚家文書『島田市史資料』第５巻	明治３年（1870）	明治３年５月に島田・金谷両川庄屋が島田役所に宛てた渡船取締りの嘆願書。谷口・細島間で渡船を行うため川越人足が失業し、廃宿の危機を訴えている。

⑤滑稽本

書　　名	年　　代	内　　容
東海道中膝栗毛	享和２年（1802）	駿府出身の戯作者十返舎一九が書いた作品で、弥次と北八が江戸から伊勢・京・大坂でハプニングをおこしながら旅をする。大井川の渡しでは侍に扮して連台の

書　　名	年　　代	内　　容
		値を節約しようとするが失敗し、慌てて賃銭を払い渡る様子を描いている。

⑥その他

書　　名	年　　代	内　　容
翁草	寛政３年（1791）	元京都町与力であった神沢貞幹の随筆。寛永３年（1626）の大井川浮橋事件を記す。
金谷上人行状記	不　詳	近江出身の僧侶で画人でもあった横井金谷の自伝。安永７年（1778）に東海道を上った際、大井川の川越人足に法外な渡し賃を求められて人足と喧嘩し、その後別の人足の助言により下流で下瀬越しをしたことを記す。また、文化元年（1804）に島田宿の国学者服部専左衛門（菅雄）と交流したことにも触れている。
大井川蓮台越	昭和９年（1934）	江戸時代の川越しについて小冊子にまとめたもの。当時の川越しの方法や人足等の気質、川越場の番宿などについて、古老の言葉で記されている。
河原町史話	平成22年（2010）	河原町在住者が河原町の成り立ちや地域の伝承をまとめたもの。川越し関連の建物や、現在では消滅してしまった高土手、紀州街道などについても記載している。

２　絵画資料

①絵図

作品名	年　　代	内　　容
東海道分間延絵図	文化７年（1806）	江戸幕府の道中奉行が五街道の様子を描かせたもののひとつ。川越場については家屋や水路・松並木を描き、川会所や高札・土橋などの名称が注記され、比較的正確に描いている。（口絵７）
ＮＩＰＰＯＮ	1832～51年	ドイツ人で長崎のオランダ商館医であったシーボルトが江戸参府の際に描かせたもので、大井川の川越しについて描いている。図版には連台や肩車で川を渡る様子と体中に刺青を入れた人足と草葺き屋根の建物が描かれている。川の向こう岸に富士山が描かれていないことなどから、島田側から金谷方面を眺望した風景と考えられる。（口絵11）
「静岡縣駿河國志太郡島田宿字大津上中溝南之図」、「駿河國志太	明治17年（1884）	現在使用されている地籍図の原図で、土地の区画が田圃や道・堤・宅地などが地目ごと色分けされ、地番が記されている。現在の地籍図（公図）と比較すれば、土地の地目や分筆状況が分るとともに、前掲の『東海

作品名	年　　代	内　　容
郡島田宿之内字横井道上之部」、「駿河國志太郡島田宿之内字善太夫島」		道分間延絵図』に描かれた街道や堤・水路・家屋の位置を一部ではあるがあてはめることができる。（口絵14、15、16）

②錦絵

作品名	年代	内容
『富嶽三十六景』東海道　金谷之不二	天保２～４年（1831～33）	浮世絵師葛飾北斎の作品で大井川の激流の中を川越人足等によって参勤交代の大名一行が渡っていく様子を描く。背景には大井川の河岸に番宿などの建物と思われる萱葺き屋根の建物と遠方に雪をかぶった富士山を配し、川越場の風景を描いている。（口絵８）
保永堂版　東海道五十三次之内嶋田	天保４年（1833）頃	浮世絵師歌川広重の作品で大井川の川原で川越人足が旅人を渡す様子を描いている。蛇篭でつくられた出しと呼ばれる波除堤防や堤に植えた松を描く。（口絵９）
東海道　川尽大井川の図	年代不詳	満々と水をたたえた大井川の中を大勢の川越人足が担ぐ連台に乗って渡っていく旅人たちを描く。その人数の多さから、川明けの様子を描いたものと推測される。（口絵10）
東海道五十三駅勝景	万延元年（1860）	五雲亭貞秀が東海道を続きの鳥瞰図で描いた図。大井川の川越しの様子のほか、川原で川越人足が夏に日除けの下で休憩し、冬は塔のように組んだ平連台を筵で覆いその中で暖をとる様子も描いている。（口絵12、13）

３　写真資料

作品名	年代	内容
「昭和五年五月静岡縣下御巡幸記念東海道大井川連台越行列」	昭和５年（1930）	昭和天皇の巡幸の際に、川越しを再現して天覧に供した時の写真。背景の大井川堤防の近くまで河水が流れ、堤防上には太平洋戦争中に伐採された松並木が見られる。さらにその背後には島田大堤と思しき松並木が写っている。（写３－４、－５）
「朝顔目あきの松」、「大井川河畔朝顔目あきの松」	昭和３年（1928）以降	善太夫嶋堤の上にあった朝顔の松の写真。現在、朝顔の松公園に建つ記念碑が松の根本に移っていることなどから、昭和３年以降に撮影されたものと考えられる。堤の幅員が『島田宿書上控』に書かれた「高六尺（約1.8m）、馬踏六尺、敷三間半（約6.3m）」に近かったことが分る。（写３－６、－７）